

キュレーションがもたらす主体的な鑑賞と表現の生成

— 中学校美術科単元「国吉康雄 オリジナル美術館を創る」の実践から —

赤木 里香子 ・ 森 弥生*

対話型鑑賞を導入した授業によって「見る」経験を積み、美術作品に親しんできた岡山市内の公立中学校2年生を対象として、平成18年度に実施した美術科単元「国吉康雄 オリジナル美術館を創る」の実践について、報告と考察を行う。

本単元は、岡山県立美術館で開催された「国吉康雄」展での鑑賞体験を、表現活動と結び付けて展開したものである。立案と実施にあたっては、学習者の立場を「見る」側から「見せる」側へ転換させ、作品収集や研究活動から展示・教育普及活動に至るまでの美術館関係者の仕事、特に展示企画（キュレーション）をモデル化し、美術館（展覧会）を創るという表現の必然と価値を見出していくことを重視した。

Keywords：美術科教育，鑑賞と表現，キュレーション，中学校美術科，対話型鑑賞

1 はじめに

美術科教育における鑑賞指導の重要性が叫ばれ始めて、すでに久しい。しかし、そのノウハウ蓄積は必ずしも十分でなく、鑑賞を適切に授業に位置づけ、さらに鑑賞と表現を有機的に結びつけることは美術科教育の大きな課題となっている。本研究は、表現と鑑賞に、両者を媒介する第三の領域「キュレーション（Curation 展示企画）」を加えた単元モデルを提示し、この課題に答えようとするものである。

ここで再確認しておきたいのは、学習指導要領に示された図画工作科・美術科の領域「A表現」と「B鑑賞」の意義である。「A表現」は、美術の各分野における表現活動を指す。つまり、言語的表現や身体表現なども含む広義の表現ではなく、何らかの造形的な作品を制作すること、言い換えれば、美術の制作そのものが意図され、生徒自身による制作物の創作が暗黙のうちに想定されている。そのモデルとなるのは美術の制作者つまり作家の活動である。

一方、「B鑑賞」は、自然や美術作品、児童生徒の作品、生活の中のデザインや工芸など対象を幅広

く設定しており、目指されているのは、よりよく対象のよさや美しさを味わう鑑賞者というモデルである。従来、多くの教師が鑑賞指導という名目で、ある一定の評価がなされた美術作品に関する一方的な知識の伝授を行っているのではないかと危惧され、鑑賞活動そのものが深められていないとの指摘もなされてきた。だが、より本質的な問題は、制作者と鑑賞者という二つのモデルの間に、どのような関係が見いだせるのか、ほとんど問われてこなかった点にあるのではないだろうか。

制作者と鑑賞者の媒介という問題に深く関わっているのが美術館・博物館（ミュージアム）である。近年の博物館研究（Museum Studies）においては、制作者と鑑賞者の媒介機能としてのキュレーションの意義が再認識されつつある。キュレーションとは、制作物の再制作であり、制作物のメッセージ性が鑑賞者に強く伝わるか否かはひとえにキュレーション次第であるといえよう。

キュレーション活動を授業内容として導入すれば、生徒たちは制作が鑑賞を前提とし、鑑賞も制作

岡山大学教育学部美術教育講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

*岡山市立岡北中学校 700-0081 岡山市津島東1-1-1

Integrated Activities of Art Making and Appreciation through Curation: Lessons in the Unit "Create Your Own Art Museum" in Junior High School

Rikako AKAGI and Yayoi MORI*

Department of Art Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

*Kouhoku Junior High School of Okayama City, 1-1-1 Tsushima-higashi, Okayama 700-0081

を前提とするという相補性を強く認識することとなるはずである。本研究では、作品収集・研究活動から展示企画・教育普及活動に至るまでの美術館関係者の仕事全般をキュレーションとして想定し、この活動を、単元全体を貫く柱として各授業を構成した。

II 本単元に至る経緯

1 国吉康雄教材による鑑賞授業を活かして

(1) 国吉康雄展の開催と教材開発

まず、本単元に至るまでの研究の経緯を簡単にまとめておきたい。

平成17年度、岡山県立美術館は財団法人福武文化振興財団の助成を受け、岡山に生まれアメリカで活躍した画家国吉康雄（1889 - 1953年）の特別展を企画するとともに、同展の開催（平成18年3月10日 - 5月7日）に先立って岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会を組織し、『教室でもできるあなたにもできる美術鑑賞ガイド』（以下、国吉ガイド）を発刊した¹⁾。本稿執筆者の赤木、森は同研究会メンバーとして編集・執筆に携わり、いわゆる対話型鑑賞（ビジュアル・シンキング）の方法を岡山県下の小・中学校現場に普及するための支援を行った²⁾。

この方法は、作品を「見る」ことから始め、「考える」ことを促し、さまざまな意見を引き出しながら作品の見方を深めていくものであり、日本各地の美術館でギャラリートークに導入されている。国吉ガイドでは、これを教室で行う場合のポイントや、生徒の意見にどう反応するか具体例を挙げ、数パターンの指導案を掲載した。その成果のひとつとして、ガイドで提案した対話型鑑賞の授業を実施するだけでなく、「国吉康雄」展の鑑賞体験を活かし、表現活動と結びつけて展開する中学校美術科単元を構想するに至った。

鑑賞と表現という二つの領域を組み合わせ、接続性と発展性を持たせた総合単元とするうえで、構想の主軸となったのは、生徒たちの立場を「見る」側から「見せる」側へ転換させることであった。対話型鑑賞によって「見る」経験を積み、美術作品に親しんだ生徒たちは、主体的に「知る」場面を通じて作家の魅力に気づいていく。この時、「オリジナル美術館を創る」という課題を与え、他者に対して国吉康雄の作品をどのように「見せる」ことができるか、企画展のコンセプトを考えさせると同時に、展示模型を造形的に「作る」うえでの目標を明確化させることとした。

単元構成について述べる前に、授業の前提について触れておきたい。なお、以下は森の行った実践に

基づくものである。

(2) 生徒の実態と授業の前提

岡山市立岡北中学校では、平成17年度より毎年10月頃、時間割を調整して3時間分を確保し、立地条件を生かして路線バスを利用し、第1学年を対象とする岡山県立美術館鑑賞授業を実施してきた。

同館は、児童生徒の観覧に際して様々な鑑賞メニューを用意している。その一つに訓練を積んだ美術館ボランティアによる小グループ編成の対話型ギャラリートークがある。これは、同館でヴィジュアル・シンキング・プログラム（Visual Thinking Program：以下VTP）と名付けられて実践されてきた鑑賞メソッドによるものである。VTPは、ニューヨーク近代美術館で開発されたVTS（Visual Thinking Strategy）や、VTS開発に携わった後に独自の方法論を展開しているアメリカ・アレナスに影響を受けながら、ボランティア・スタッフによって練り上げられてきた³⁾。

こうした蓄積を持つ美術館と連携することによって、本校1年生は、作品と向かい合う鑑賞の基本的な態度を学ぶことができるであろう。また、教室に帰ってからも対話型鑑賞を恒常的に組み込んだ学習活動を展開することによって、生涯にわたって美術と親しむための基礎を身につけさせたいと考えた。

平成17年度の1年生の美術館鑑賞では、常設展示された国吉康雄の作品を対象に、対話型鑑賞のギャラリートークを経験したグループがあった。それ以外の生徒も、会場で国吉の作品を目にした可能性がある。



図1 平成17年度1年生 岡山県立美術館にて

2. 1年次に実施した対話型鑑賞授業とその展開

(1) オープンエンド型鑑賞：（1時間）

平成17年度3学期末、1年生を対象に、国吉康雄作品《カーテンを引く子供》の図版を用いて、対話型

(ビジュアル・シンキング)の鑑賞授業を行った。前述の国吉ガイドとともに配布された、A1カラー版の《カーテンを引く子供》《夜明けが来る》《祭りは終わった》の図版のうち、《カーテンを引く子供》の、子供の姿の部分を切り出してスチレンボードに貼りつけ、立体化したものを使って実施した⁴⁾。

これは、その後も常に美術教室入り口付近に立て、生徒の目に触れるようにしておいた。これにより、まもなく開催される「国吉康雄」展について知らせ、期待感を高めるねらいがあった。生徒たちは、この子供像に「くにちゃん」というニックネームをつけた。



図2 「くにちゃん」、教室に登場

(2) 鑑賞用ワークシート作成：中学生のためのワークシートをデザインする。(1時間)

まず、5ヶ月ほど前の美術館鑑賞体験を振り返らせた。4名1組のグループでディスカッションさせた後、「国吉康雄」展開催を契機に初めて一人で美術館を訪れる中学生のために、作品と対話できるようなワークシートをデザインさせた。岡山県立美術館の所蔵品図録2005年版に掲載されている国吉作品を、すべて縮小してプリントしたものを準備し、自由に選択しレイアウトできるようにした。

この時、いろいろな美術館で作られた児童生徒向けのワークシートを紹介した。凝った仕掛けのあるものや、楽しいイラストが描かれているものなどを紹介したのは参考になったようだ。

生徒たちの美術館体験が現れたものとして、「作品を大切にね。」「他の人の迷惑にならないようにしましょう。」「飲食はだめ」など、マナーに関する記述が多く見られた。また、「くにちゃん」のイラストを案内役にして、「何が起きているのでしょうか?」「あなたはどう見える?」「それはどうして?」といったオープンエンド型のQ&Aが展開していくワークシートの構成が多く見られた。これは、中学

生が楽しめるものを作ろうとした際、自分たちが対話型ギャラリートークで楽しめたことを振り返り、そのプロセスを再現しようとしたことに基づくと思われる。

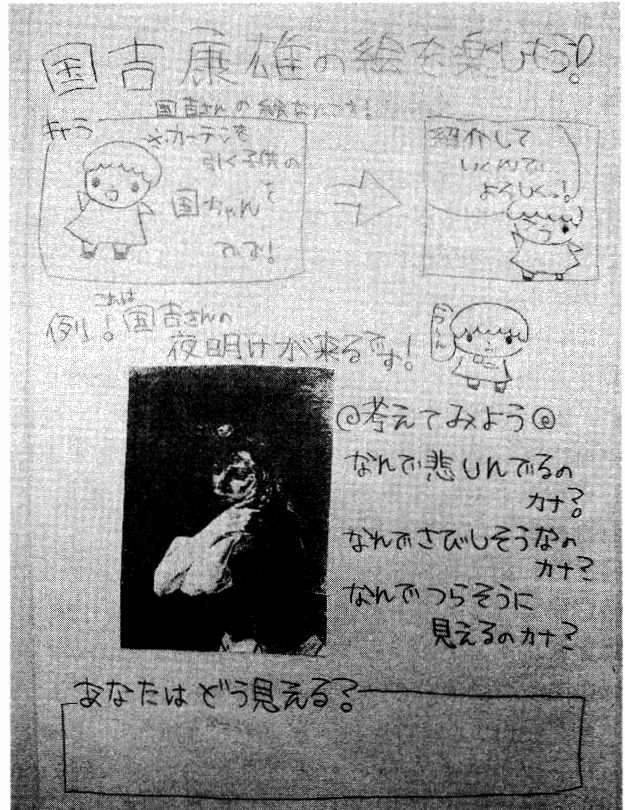


図3 中学生による中学生向けワークシート

III 総合単元「オリジナル美術館を創る」の構成

以下に示すように、まず予備的な実践として、第2学年1学期冒頭に、オリエンテーションを兼ねた表現題材「OPEN YOUR HEART」を実施し、続いて「オリジナル美術館を創る」を、4月から夏休みを挟んで11月まで展開した。この課題に入る前の授業を含めると総時間数は18時間に及ぶが、活動内容は自己表現を目的とする制作から、対話型鑑賞、展覧会鑑賞、比較鑑賞、他者に伝えることを目的とする制作まで、多岐にわたっている。

教室で行う鑑賞の授業とそれに連動した美術館鑑賞が、生徒の表現活動にどのように反映され、生徒が自ら美をどのように価値づけて深めていくのか、この単元化した授業によって検証しようとするものである。

(1) 表現「OPEN YOUR HEART」：ハートをモチーフとする平面・半立体の作品制作。色と形、素材だけでどれだけ自己表現が可能かを試す題材。(1時間)

生徒は1年次冒頭で、同じ題材名の授業を体験している。これは、新入学時の気持ちをハートの色と形で表現して自己紹介するものであった。この授業でも、さまざまな「気持ちを表す」自己表現が目標となる。

1時間の授業のうち、前半20分は教師が用意した資料を見ながら対話型の鑑賞を進める。ハート型に切り抜いた紙を見て、なぜ即座に「心」「心臓」「恋愛」と発表できるのか、青色のハートを見てなぜ「失恋」「絶望」「哀しみ」と感じるのか、自分がそう感じた理由を自分自身で見つけながら、形のない感情や気分が色や形で表現されることを再認識するのである。

この後、予めハート型を印刷したA4画用紙に、30分で制作を行った。1年次では絵の具を使用した。2年次では、表現材料・方法を自由にし、色紙やセロファン、針金など多様な素材を用意して表現させた。完成後「教室美術館」として相互鑑賞し、自己評価カードに記入した。

(2) オープンエンド型鑑賞：国吉作品《鯉のぼり》によるビジュアル・シンキングの授業。国吉ガイド付録図版を活用。(1時間)

4月下旬の「国吉康雄」展鑑賞に備えて、ガイドのワークシートを使った鑑賞を行った。《鯉のぼり》は副読本の『岡山県版 美術資料』（秀学社）にも掲載されている。この時点でオリジナル美術館を創ることを告げ、美術館鑑賞への期待感を高めると同時に、美術館の展示の仕方やお土産グッズなど作品以外にも注目して鑑賞するようにアドバイスした。

(3) 「国吉康雄」展鑑賞：対話型ギャラリートークと自由鑑賞を体験。(2時間)

家庭訪問期間を活用して、クラスごとに美術館を訪問した。小グループで美術館ボランティアによる対話型ギャラリートークを体験した後、国吉康雄の作品群をじっくりと自由鑑賞した。美術館鑑賞の際には小遣い持参を許可しており、絵はがきやお土産グッズを多くの生徒が購入した。また展覧会場にはガイド編集者作成のワークシート7枚が用意されていたので、多くの生徒が手にして会場を回っていた。

(4) 比較鑑賞：国吉作品《鯉のぼり》《夜明けが来る》の時代による変化に気づかせる。(1時間)

帰校後の最初の授業で、ガイド付録の図版とワークシートを使って比較鑑賞をした。これまでの対話型鑑賞学習に加え、「国吉康雄」展ではほぼ画家の生

涯にわたる画業を鑑賞したとあって、活発な話し合いと発言があり、劇的に色彩が変化した二つの作品の違いと共通点とを読み解いていった。授業の最後に付録の年表を配布して作品が制作された年代を確認し、読み取ったこととの関連については各自に任せた。しかし、生徒たちの内面では、学校でのワークシートづくりや対話型鑑賞の体験、意図的に展示された実作品を鑑賞したこと、社会科や国語科など美術科以外の学びが、年代の違う2作品を集団で対話しながら鑑賞することを通して自然につながっていく様子が見て取れた。

(5) 「オリジナル美術館を創る」導入とグループピング：導入として、教科書（美術2・3年下「展示に込められたメッセージ」日本文教出版）の「田中一光」展と「国吉康雄」展を比較し、展示方法の違いに気づかせる。(1時間)

ポスターを中心に展示した安藤忠雄の手になる会場風景と、先日訪れた「国吉康雄」展の展示とは、はっきりとコンセプトが異なっている。どこがどう違うのか、なぜ違うのかを、これまで行ってきた対話型鑑賞のスタイルで話し合ううちに、展示にはそれぞれに意図があることに気づく。また、岡山大学大学院教育学研究科美術教育専攻の平成16年度修了論文として、小西多賀子氏が作成した「展示ゲーム」（アートゲームの一種で、図版カードを取捨選択して展示を構成したり、展示された作品群からテーマを当てたりする）についてのプレゼンテーションをプロジェクターで鑑賞させ、展示の意図をどのように集約していくか気づかせた。

ここで、初めてチームを組んでオリジナルの国吉康雄展を開催するという学習目標を提示した。生徒たちのモチベーションは十分に高まったと判断して、課題達成を目標とする協働可能なチームを自発的に組ませた。仕事量や作業スペースなどから、1チームのメンバー数は4～7名とした。

(6) キュレーション演習：生徒作品「OPEN YOUR HEART」を活用したテーマ展示練習。テーマによって全く異なった作品選択と展示が発生することを体験的に学ぶ。(1時間)

男女混成32チームに分かれての最初の活動として、1学期の表現題材「OPEN YOUR HEART」で作った作品を使って、ミニ展覧会を企画・展示した。

予め181名全員の作品を、壁面に立てかけたスチレンボードにピンで簡単に留めて並べておく。グル

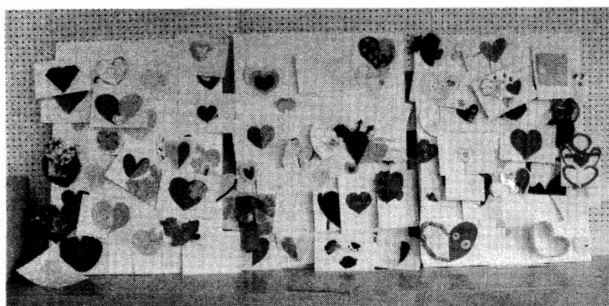


図4 企画・展示される前の作品群

ープで作品を見ながら展覧会のテーマを決め、テーマに合った作品をピックアップして、自分たちの机の上に、テーマにふさわしい展示を試みる。10分程度でテーマを絞り、作品をピックアップしたのち、15分程度で展示した。生徒は、手持ちの教科書・ノート・文房具なども使いながら、展示の構成を工夫した。展覧会名を画用紙に書かせるが、テーマがすぐに読み取れないように裏返しておく。

完成後、グループで他のグループの展示を鑑賞し、展覧会テーマを推理して、画用紙の裏で確認した。目的グループとしてのチームワークがよいか、キュレーションを理解しているか、テーマにあった作品の選択ができたか、テーマを生かした展示の仕方ができたか等について評価し、最後に優れたテーマ・展示だったと感じたグループについて、理由を上げながら賞賛した。

これによって、チームワークの練習・テーマと選出作品の関係、テーマを生かす展示効果などについて、一通りの練習とメンバーの相互理解が図られたようだ。

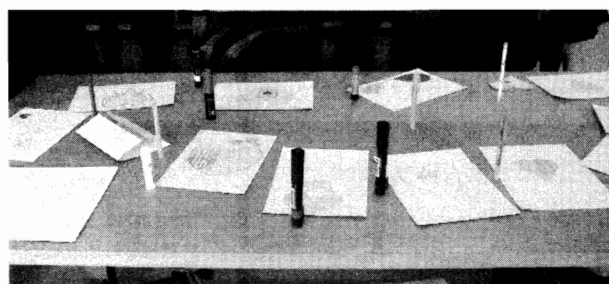


図5 机上での作品展示

(7) テーマ決定と作品選定：展示のテーマと作品選択、そして展示の工夫は相互に関連していることを確認しつつ、オリジナルなテーマに合った国吉作品、他の作家の作品を選択する。(グループごとで進行・2時間前後)

チームに展覧会の図録を一冊ずつ渡し、作品を見ながらテーマについて話し合う。他に資料として

『岡山県立美術館 収蔵作品選 2005』、『大原美術館の120選』『大原美術館 海外の絵画と彫刻－近代から現代まで－』を教室に置いて、閲覧できるようにした。

また、学校図書館に要請して、授業中に調べ物に使ったり、レファレンスサービスを行ったり、常時接続できるインターネットの利用、カラーコピーなどに対応していただいた。美術室にも一台インターネットにつながるPCを置いて、検索に利用できるようにした。

(8) 1/50の美術館模型制作：美術館鑑賞の体験からどのような仕事が必要かを話し合い、役割分担して制作する。(グループごとで進行・5時間前後)

テーマの話し合いと平行して、美術館・展覧会開催にはどのような仕事が必要かを話し合い、分担した。グループで話し合ったことを教師が板書し、以下のような職種を例示して仕事内容を確認させた。

- ・館長・渉外
- ・学芸員
- ・インテリアデザイナー・大工
- ・広報・グラフィックデザイナー
- ・グッズ・小物制作
- ・教育普及

岡山県立美術館の地階フロアを1/50で制作するため、平面図・立面図の1/50コピーを渡した。見通しを持った学習活動を行うために、毎時間、館長役の生徒を集めて本時に到達すべき目標を伝え、ワークシートに書き込みながらメンバー全員がその時間に何をするか確認しながら授業を進める方式をとった。また、それぞれの係ごとに集めて、材料の配布や加工の仕方などを指導した。

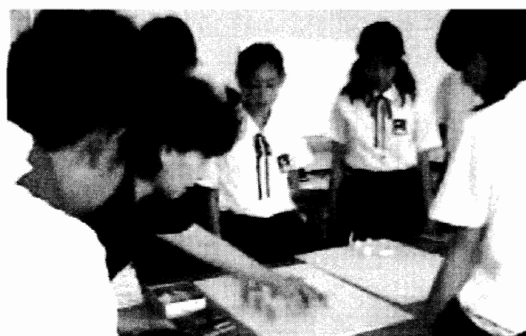


図6 係ごとに集めて指導

4～7名の小グループだが、リーダーシップの有無、テーマの共通理解度などによって取り組みに大きく差が出るため、個別に支援する必要があった。そこで、赤木が担当する岡山大学教育学部「美術教

材論A」の履修学生に、教材研究の一環としてオリジナル企画による展覧会の模型制作を依頼し、生徒たちが具体的な完成予想のイメージを持てるようにした。また、アメリカのゲティ美術館が作った展覧会制作キットを用いて、作品に合った展覧会場のカラリング、会場の装飾、模型にリアリティを与える観客配置などを実演して見せた。

この段階でテーマについての十分な話し合いができていないチームは、のちのちまで停滞した。学習後にとったアンケートでも、「この学習活動に最も重要なことは？」の問いに、多くがテーマの話し合い、チームワークを挙げていたことから、(7) (8) 段階の重要性は明白である。

なお、1/50スケールにカットしたスチレンボードのフロア、側壁、構造柱などを配布し、他に軽量粘土、針金、塩化ビニル板、ミラー加工したアクリルシート、木材、接着剤、色紙、カラーセロファンなど、各種材料を用意したほか、生徒の要望に最大限対応した。一学期中にテーマ・作品選定ができたグループから、活発な制作活動を展開し始め、32グループのうち、6グループは夏休み中に時間を決めて集まるほどに自律的に学習が展開した。

(9) 主旨説明・解説用B全パネル制作：挨拶文や企画に合わせて作成したグッズやポスター、ワークシート等を掲示。(グループごとで進行・5時間前後)

2学期冒頭に、展示模型にあわせて、展覧会の主旨が一目でわかるような展示解説パネルを作成することを指示した。展覧会ポスター、会場入口に掲示する展覧会主旨説明文、パンフレット、作品キャプション、ワークシートなどをB全パネルにピンナップするのである。これによって、模型制作と同時に、展覧会を「見せる」立場から、より踏み込んだテーマの追求がなされた。

例えば、子どもに楽しんでもらうというテーマに即して、分かりやすいワークシートの開発が必要になり、会場でちょっと遊べる遊具が新たに開発されたし、お土産にももらったら喜ぶだろうと、「くにちゃん」をモチーフとした携帯ストラップやミニ絵本づくり、国吉が初期にモチーフとしていた牛をかたどったマスコットづくり … といった具合である。これまで展覧会を見せる側に欠けていた視点や、あってほしいサービスなどについて、利用者の視点から考え始めたのである。

10月にはほとんどのグループの模型やパネルが形になり始め、他のグループの活動を見て刺激を受けながら、全員がどの時間も何か仕事があり、必要

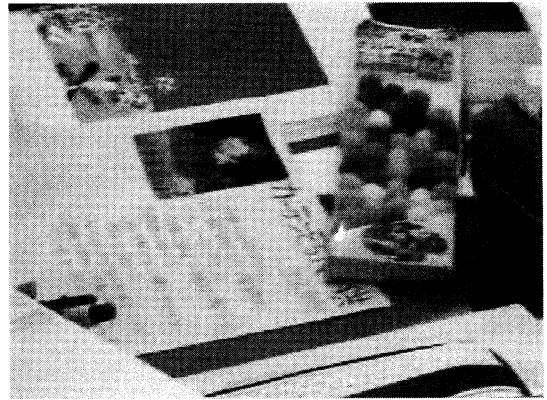


図7 制作中のパネルとグッズ

に応じて話し合いを設定し、テーマにそぐわない提案や装飾については厳しい議論がなされて、一から作り直したりした。放課後、毎日のように数グループが入れ替わり立ち代り、美術教室にやってきて制作し、教師もそれに対応した。特に、展示用の作品はデジタルカメラで撮影し、生徒の要望にあわせて縮小してカラープリントする作業に時間を要した。

パンフレットやキャプションづくりには、PC教室を借りてワープロやプレゼンテーションソフトも利用させた。この段階になると、当初の役割分担を越えてメンバーそれぞれが持っている得意分野をうまく生かすようになり、新しい提案がどんどん出てきていた。また、これまでのさまざまな教科を超えた学びが、必要な場面場面でつなぎ合わされて活用されている。毎回、授業の始めに行うグループ会議も継続して有効であったようだ。

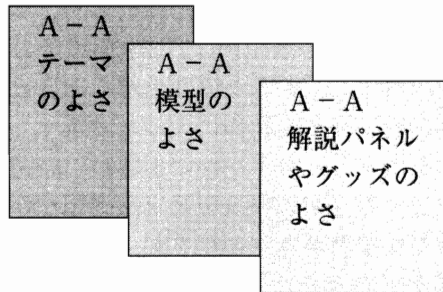
(10) コンペティション・相互評価：校内公開授業とし、5クラス一斉に体育館にパネルと模型を展示。32チーム対抗の投票式コンペと相互評価アンケートを実施。(2時間)

12月、2時間続きで5クラス一斉授業の時間を組み、体育館を借りてコンペティションを行った。この授業は校内に公開した。100分の流れは以下の指導案の通りである。

生徒活動	
1	模型パネルを展示し、チームで自己評価してワークシートを書く。 <div style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">チームで【10分】</div>
2	全チームの作品を鑑賞して3つの観点から優れた作品を選び、投票する。 <div style="text-align: right; border: 1px solid black; padding: 2px;">チームで【15分】</div>

- テーマのすぐれているもの
- 模型がテーマをよく表現しているもの
- 解説パネルやグッズがテーマを引き立てているもの

※ 投票用紙（グループ用3色カード）



4 個人で総合評価し、優れた作品に投票する。

個人で【15分】

※ 投票用紙（個人用白色カード）

氏名
コメント

4 集計し表彰する。

全体で【10分】

5 チームで今一度ワークシートを書く。

チームで【各10分】

6 まとめを聞く。



図9

生徒は生徒の作品を本当によく鑑賞する。自分が展覧会を「見る側」であると同時に、展覧会を企画した「見せる／見られる側」であることから、複眼的な鑑賞が成立している。グループごとにテーマを追求して主体的に取り組んだからこそ、作品のよしあしについては温かくも厳しい評価を以て投票していたようだ。

テーマのよさ部門・模型部門・展示パネル部門に分けて評価し、総合得点でグランプリを決定した。

テーマと展示解説パネル部門では「国吉康雄の女の魅力」をテーマとしたグループが、圧倒的な物量と、テーマを強くアピールする作品選択・解説・グッズなどの出来栄で評価された。

模型部門では、コーナーごとにくっきりとインテリアを変え、フェルトなどをうまく利用して屋上を付け加えたおもしろいフロアプランのグループが選ばれた。



図8



図10

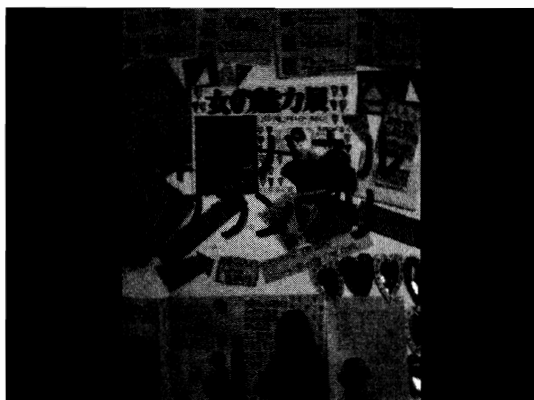


図11



図12

総合グランプリは、徹底して「国吉の牛」にこだわり、牛のフィギュアをお土産グッズとして30個作成し、しかも一つ一つラッピングしたグループになった。技術的に優れたメンバーのいるチームではないが、子どもにとってこんな美術館・展覧会だったらいいなあと思わせる温かくて優しい作品づくりを、一丸となって黙々と進めていたグループである。

なお、この作品の一部は地域の公民館祭りに展示して、たいへん好評であった。これによって地域住民にも中学校美術科の取り組みの一端を紹介することができた。



図13 総合グランプリのチーム

IV 成果と今後の課題

最後のコンペティションには、全32チームが参加した。模型またはパネルが完成に至らなかったチームも2つほどあったが、こうしたチームのメンバーも、他チームの作品を熱心に鑑賞し、評価の記入や投票を積極的に行うことができた。全体的に高い関心を維持することができたのは、2学期以降の制作活動に生徒が熱中し、大きな盛り上がりを見せたからであろう。特にパネル制作に入った段階で、主旨説明の文章を考えたり、テーマにふさわしい国吉作品や関連する他の作家の作品を選定し直したりするうちに、新たな発想が次々と生まれ、制作のための技能の獲得が促された。「見る」経験を積んだうえで「見せる」立場を意識させることによって、表現意欲が高まり、目指す表現の水準も上がったのではないだろうか。

なお授業終了後、模型、パネルとともにチームごとの記念撮影を行った。その際、生徒自身にデジタルカメラを渡し、美術館・展覧会のイメージがよりよく伝わるよう、模型を撮影するように指示した。何枚か撮影した後、メンバーで話し合っ各チーム3枚程度の「ベストショット」を絞った(図14-1~3はその一例である)。写真についての詳しい分析は今後の課題とするが、会場を俯瞰して全体像を示そうとしたもの、鑑賞者の視点から捉えたものなど、どう見せたいか、どう見られるかを意識した撮影パターンがあると思われる。

キュレーション(企画展示)活動による、鑑賞と表現の相補性を示すことだけが本研究の目的ではない。美とは何かを生徒自身が考え、問い続ける姿勢を育てることが最大の課題である。この課題に応えられたのかどうか、授業中にとったアンケート結果や、3年次での振り返りの結果を踏まえて、今後も検討を続ける予定である。

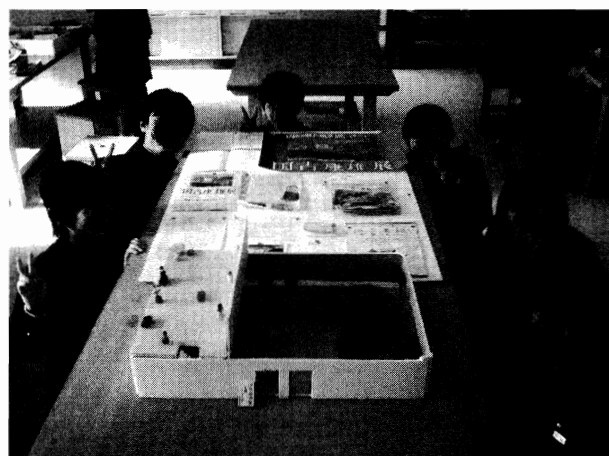


図14-1 チームで記念撮影

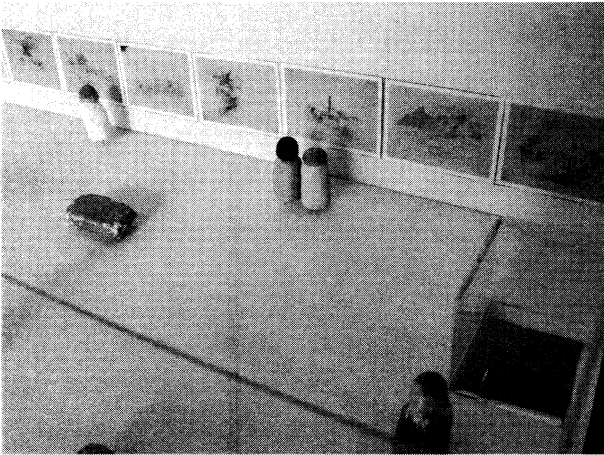


図14-2 生徒撮影による展覧会イメージ

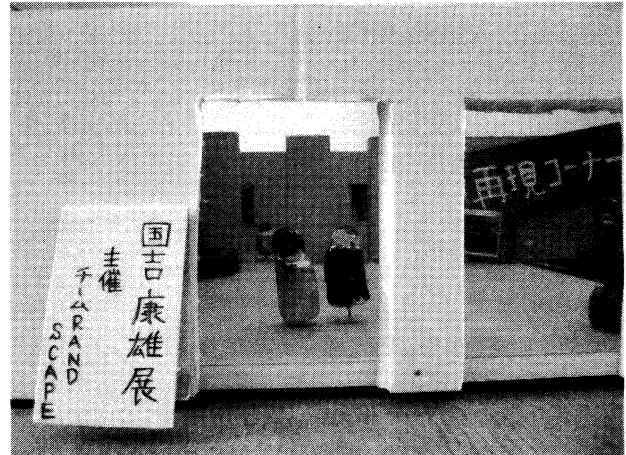


図14-3 生徒撮影による展覧会イメージ

註

- 1) 岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会編『教室でもできるあなたにもできる美術鑑賞ガイド』岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会，2006年3月。研究会の運営と本ガイドの発行にあたっては，財団法人福武文化振興財団の助成を受けた。ガイドの内容は，岡山県立美術館HPの「学校関係の皆様へ」でも公開されている。
- 2) 「国吉ガイド」開発の経緯と課題については，山口健二，森弥生，赤木里香子「研究報告：岡山県立美術館『国吉康雄展』と連動した中学校美術科鑑賞教材開発とその展望」，『美術教育』第290号，2007年3月，pp.150-151.参照。
- 3) 平成18年夏には，アレナスが監修する「mite展」が開催され，一般募集のボランティアも参加してアレナスから集中的な研修を受け，展覧会期

間中全般を通じて，来館者に対話型ギャラリートークを提供した。

- 4) 国吉ガイドに基づく授業の実際については，山口健二，森 弥生，赤木里香子「見る・作る・知る，そして問いかける」，『美育文化』第56巻第5号，美育文化協会，平成18年9月，pp.26-35.において述べた。

参考文献

- ・遠藤友麗編著『改訂中学校学習指導要領の展開』，明治図書，1999年。
- ・Linda D'Acquisto, *Learning on Display: Student-Created Museums That Build Understanding*, Association for Supervision and Curriculum Development, Virginia USA.2006.